

2008年(平成20年)

第7号

(7月15日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会

発行責任者：渉外部長 宮地啓安

〒605-0041 京都市東山区三条蹴上

TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

地球環境問題と明るい社会づくり運動について

今月7日から始まった北海道洞爺湖サミット(主要国首脳会議)は9日午後、福田康夫首相が議長総括を發表して閉幕しました。首相は地球温暖化ガス排出量を2050年までに半減する長期目標を世界全体で共有したと強調しました。しかし、主要8カ国と、中国、インドなどの間で、排出削減をめぐる責任のなすりつけ合いとも映る場面がみられ、各国の隔たりを見せつけられました。

本会では、環境問題に対して、次のように考えています。

どんなに経済的な豊かさを追い求めても、私たちは真の幸福を手にすることはできません。なぜなら人間の



の欲望には決して限りがないからです。本会では「少欲知足」の精神を大切にしています。仏教徒の視点から「人と自然の調和をめざした生き方」を

社会に提言することが大切だと考えています。そのために、身近なところでの活動から国際的な協力まで、幅広く取り組んでいるのです。

仏教的に見れば、「人と自然の調和」「人と人との調和」を図ることが、本来の人としての生き方であると、庭野日敬開祖は、繰り返し、繰り返して述べております。

地球環境問題は、決して遠くにある問題ではありません。一人ひとりが、日頃の生活や仕事をしている中こそ、環境問題への取り組みが存在するのです。

それにはまず、私たちが自分中心の心を切り替えることです。そして、人と人との間の不信感をなくし、信頼と友情を回復することが大切です。すなわち、自分のエゴイズムを捨て、相手を信じ仰ぐという信仰を基盤とした、人間尊重の精神が必要です。

この精神を広げていこうとする運動が、「明るい社会づくり(明社)運動」にほかなりません。京都でも、各地区明社と京都府連絡協議会が、この精神の普及に日々取り組んでいます。

一食を捧げる運動

『ゆめポッケ・キッズキャンペーン』

今年で10年目を迎える『ゆめポッケ・キッズキャンペーン』が6月1日よりスタートしています。このキャンペーンは紛争や対立で傷ついた世界の子供たちの心を癒やすため、文房具やおもちゃなどを持ち寄り、手作りのポッケに心も一緒に詰めておく運動です。小中学生が一食を捧げる運動の精神を育み、豊かな心を育てることも目的のひとつです。8月31日までの3カ月間、婦人部と少年部が中心となり行われます。

家に使われないでいる文房具やおもちゃがあれば、ぜひ京都教会へお持ち下さい。ポッケに入れてはいけなものがありますのでご注意ください。

- 武器を連想させるもの(水鉄砲や大砲などの玩具など)
- 宗教的なもの(クリスマス、十字架、豚など)
- 液体や粉末(シャボン玉や粉末ジュースなど)
- 衣類
- 電池で動くもの
- 使用済みのもの(鉛筆や消しゴムなど)
- 衛生用品(石鹸やシャンプーなど)

ポッケの大きさは25cm×35cmの巾着です。あまり大きいものは入らないのでご注意ください。

洞爺湖サミットに集まった世界の指導者。「道具」をうまく使いこなし、多くの人を幸福に導いてもらいたい。

時事刻々
ハンセン落選のニュースは世界中を駆け巡った。北島が出した驚異的世界記録が重圧となつたといわれている。競泳の世界で急にクロースアップされたスリード社のレーザ・レーサー。新記録の続出に世界は沸き立っている。水着という道具に話題独占の状態に、選手たちは「泳ぐのは自分たち」といって、過熱気味の報道に水をさした。人類は「道具」との出会いにより発展してきた。象より力を持ち、チーターより速く走り、空高く飛べるようになった。しかし、便利で強力な道具も、使い方によっては、人類に福をもたらすものもあれば、禍をもたらすものもある。そういう意味で、「道具」として、使い手の心の持ち方、考え方に大きく左右される。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

中国についての庭野開祖の歓待ぶりはもったいない程至れり尽くせりだった。第二回の世界宗教者平和会議が迫っており会談の席では特に参加の説得に努めた。

「世界の宗教者が国の違い・宗派の違いを超えて協力しあわなくてはどの国の平和も守れない。中国の宗教者も孤立せず世界に向かって発言して下さい」と説いて回ったが「外国の宗教者が過去にたくさん中国にやってきたが、その中にスパイがいた」と言った話が出てくるなど、参加までまだ時間が必要だと感じた。

庭野開祖はあきらめることなくその後も国連中国代表部や在日中国大使、中国仏教会を通じて参加を呼び

掛け、ついに第三回宗教者平和会議に中国の代表団参加が実現した。第一回の京都会議から足掛け十年の歳月が経っていた。中国代表団は中国仏教協会会長である趙樸初師を団長とした一行であった。この第三回会議では、中国の代表団が日本代表団に一つの提案をしてきたのである、「世界宗教者平和会議の名のもとに、核保有国指導者に対し、核兵器の最初の使用者にならないと約束してもらう申し入れを行う」と言う提案であった。中国代表団はこの会議に真剣に取り組む姿勢であった。

第三回会議では様々な成果が上がったが、特に忘れられないものとして趙樸初師とのくつろいだ語りであった。以下次号で。

私のほのぼの日記 (京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです)

原 点

京都府議会 植田よしひろ

海拔 600m、世帯数 38 戸、人口 100 人。私が生まれ育った故郷です。若者が町に出、高齢化が進み、間もなく“限界集落”と呼ばれるのかな。

小学6年間、往復 10 km を大きな鞆を担ぎ通ったものです。朝、7時過ぎには家を飛び出し上級生の背中を懸命に追い、帰りは遊びながらの2時間、帰り着く頃には夕餉を炊く煙が上がっています。始業ベルが鳴ってから飛び込んでくる学校近くの同級生、ただただ羨ましい。「なぜ、僕たちだけがこんな思いをしなくてはならないのか」と誰を恨んだのか愚痴がこぼれます。我慢すること、堪えることを学びました。

突然の病気、急いで救急車を呼ぶ。到着まで約 20 分、近くの病院まで約 1 時間もかかるんです。助かる命も助からない。こんな現状に何とかならないのか、何とかしたい、大人になった今も考え続けています。

いただいたご縁の中で

京都市議会 あびこ和子

私が立正佼成会とご縁をいただいたのは、ずいぶん昔? のことです。30年ほど前に、「明るい社会づくり運動」にお誘いいただいたのが始まりです。その時々皆様の暖かいご配慮の中から「法華経」に根ざした真理を私なりに学ばせていただいています。先日お聞きした「自燈明・法燈明」は今も心にあり、日常生活での実践を心がけていきたいと思う日々です。

年齢だけは重ねていますが、演説は下手、書くのも苦手、おおよそこの職にはそぐわない私です。しかし、多くの人に支えていただき、平成11年の初当選以来、3期目を勤めさせていただいております。

息子家族とともに暮らしながら、主婦の目線で市政を見ていき、区民本位の明るく住みよい街づくり、誰でも家庭と仕事を両立できる社会、お年寄りが安心して暮らせる生活環境を築いていきます。

京都佼成議員懇話会とは、京都教会とご縁をいただいている地方議会の議員さん方の情報交換の場、仏教真理を学んでいただく場として、昨年12月に発足しました。その後、隔月毎に早朝7時からの勉強会にご参加いただき、共に研鑽させていただいています。今回より、ご参加いただいております議員さん方から投稿いただき、その人となりや、お考えを披露させていただければと考えております。

佼成会ミニ知識

お襷のかけ方と書かれている意味《必須アイテム②》

先月のお数珠と並んで必須アイテムの一つ「お襷(たすき)」です。

お襷は僧侶の方が身につけている法衣、袈裟(けさ)に相当するものです。私たちは在家仏教徒ですから、法衣を簡略化したものとしてこれを使わせて頂いています。お襷を身につけ、凡夫であっても、清らかな心で修行精進させて頂いています。

前に「南無妙法蓮華経 立正佼成会本部」、後ろ(朱印が捺印してある)には「南無妙法蓮華経 教菩薩法仏所護念」と開祖のご染筆の文字が印刷されています。

〈妙法蓮華〉とは泥の中から清らかに咲く蓮の花のような、強く美しい生き方を示された教えであるということ、〈仏所護念〉とは仏さまが久遠のむかしから護り念じてこられた大切な法であるという意味です。

企業経営と平和のコーナー 「仏教を仕事に生かす」

部下育成の意義

人材育成は、企業の成長のためであると同時に、自分の成長を願う部下一人ひとりのためでもある。管理者もその部下も、企業の一員であるとともに、一個の人間である。その一人ひとりの人間は誰しもが「自分自身の成長を願い、もっと力をつけて自分の持ち味を大いに発揮したい」という気持ちを抱いている。

また、自分よりも経験豊富な上司が自分を指導してくれることを求め、期待している・部下の育成には、このような部下の期待に応え、部下を成長させて、部下一人ひとりの将来を開くという意味がある。

部下育成こそ真の人間尊重である

「この人なら」と信じて慕うことのできる上司に巡り

合ったことがあるであろうか。もしあるとすれば、その上司があなたにどのような接し方をした人かを思い出し、出していきたい。おそらく、あなたを甘やかしたり、楽をさせてくれる人ではなかったはずだ。あなたを「どのように育てるかを真剣に考え、厳しい愛のムチで導いてくれた恩師とも言うべき人」であったに違いない。

人を育てるということは、真の人間尊重の基本であり、行為でもある。先輩に教えられて育てられて一人前になった自分が、次は人を育てる側にまわり、後輩を育て、人を残す役割を担う。一人ひとりを最大限に成長させ、精神的な充実感を高めることが人間尊重の本質だといえよう。

WCRP(世界宗教者平和会議)インターナショナル・トラスティーズ会議報告

平成 20 年 6 月 8 日・9 日の 2 日間、イギリスの首都ロンドンで、IT(インターナショナル・トラスティーズ)会議が開催され、IT からは酒井教雄参務(本会元理事長)。JT(ジャパニーズ・トラスティーズ)からは田中常隆代表と田中規之京都教会渉外部副部長、事務局から増田信俊佼成学園常務理事と赤川恵一外務部次長、杉野恭一国際事務総長補の計 6 名が参加した。

6 日に現地入りした一行は会議に先立ち、庭野開祖が 29 年前に宗教界のノーベル賞と言われる「テンプレート賞」を受賞した際に贈呈式が行われたウィンザー城や、受賞後に記念講演をしたギルドホールを訪問し、宗教協力のために身命を惜しまず取り組んだ庭野開祖の遺徳を偲び、世界の平和境建設への決意を新たにした。また、ロンドン在住の本会会員との交流会も行われ、海外における布教のあり方などについて酒井参務から親しく指導を受けた。

8 日夕方からは IT(インターナショナル・トラスティーズ)メンバーと合流、英国聖公会のセントポール大聖堂でのミサに参加し、平和への祈りを捧げた。その後、夕食会の会場となった「和解と平和のためのセンター」に移動。席上、酒井参務から昨年の 11 月にブラウン夫妻の招きにより、JT(ジャパニーズ・トラスティーズ)のメンバー 16 名が米国ケンタッキー州のルイビル市で開催された「諸宗教対話の祭典」に参加し、ご夫妻の果たしている役割に深く共感し感銘したことを述べられた。更に、現在内戦状態にあるスリランカを先ごろ訪れ、WCRP としての平和への取り組みが一步一步なされている事の報告があった。

このセンターは 1993 年にテロにより爆破されたが、その後再建され、第二次世界大戦のビルマの戦場で戦ったイギリス兵と日本兵がこのセンターで会合を開くなど、和解と平和のための様々な活動を展開している。

建物の壁には旧日本兵が贈った「昨日の敵は今日の友」というレリーフが飾られている。

翌、9 日朝から宿泊先のルーベンス・パレスで会議が始まった。ベンドレイ国際事務総長より WCRP の現状報告と今後の方向性などの発表のあと、各委員と積極的な意見交換が行われた。特に前日報告のあったスリランカ和平への取り組みについて質問が出るなど、具体的な行動へ対する関心が高かった。

午後は、今年から WCRP の国際委員会会長に就任された英国聖公会のカンタベリー大主教を公邸であるランベスパレスに訪ね、ティーブレイクをしながらの和やかな交歓会となった。



カンタベリー大主教と歓談する酒井教雄参務

カンタベリー大主教の招きによりロンドンで開催となった今回の会議も、この後の夕食会を最後に全日程を終え、一行は 10 日夜に帰国の途についた。

※WCRP トラスティーズ(評議員)とは

WCRP 発展のため、特に財的基盤の確立と世界的な認知度の向上において、WCRP の中心組織である国際管理委員会と国際執行委員会を支援することを目的としている。1999 年にインターナショナル・トラスティーズが、また、2006 年にジャパニーズ・トラスティーズがそれぞれ発足した。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《同士のぬくもり》

世界会議に向けて日本の宗教者を訪ね歩いていた庭野開祖だったが、アメリカでもグリーン博士とジャック博士が中心になって、会議への働きかけが精力的に進められていた。

昭和44年7月、アメリカで世界会議のための実行委員会が開かれた。ボストン郊外にあるマサチューセッツ工科大学のエンディコット・ハウスが会場だった。

実行委員会は、まず世界会議の会期を翌45年10月16日から21日までの6日間とすること、会場は国立京都国際会館とすることを決め、ローマ教皇に対して協力要請を行うことを決定した。そのあと、会議出席者の選び方と呼びかける方法、会議のプログラムなどについて、夜の10時過ぎまで熱心な討議がつづいた。

緊張の連続からか、庭野開祖は胃に違和感を覚え、血便が出ているのに気がついた。前の年に胃の手術をしたばかりで、その接合部からの出血のようであった。体を案じて、外国の委員もつぎつぎに見舞いに来た。グリーン博士とジャック博士は、心配そうに庭野開祖の容態を尋ねて「すぐに医者呼びましょう。場合によっては、このまま帰国されたほうがいいかもしれない」としきりにすすめた。

予定ではこの実行委員会のあと、ロンドン、ジュネーブ、ローマに飛んで、ヨーロッパの宗教界の指導者の方々を訪ねてまわるスケジュールを組んでいた。ヨーロッパの宗教界のトップリーダーの協力なしに、世界の宗教者の会議と呼ぶにふさわしい会議はできない。けれども、ヨーロッパの名だたる宗教者をだれが説得するかという段になると、日本以外の他の委員たちはヨーロッパの宗教界の事情を知り過ぎていたためか、かえってしり込みしてしまう。

庭野開祖は自分のような仏教徒が説得役を引き受けたほうがいいのかもしれないと考え、「その役を、私たちが引き受けましょう」と申し出ると、「おお、やってくれますか」と、ひと安心といった表情を見せたのだった。自分から説得役を申し出たにもかかわらず、ここで医師の診察をうけたら安静を命じられるのはわかりきったことで、ヨーロッパに飛ぶことなど許されるはずがない。同士の友情に心から感謝しつつ、庭野開祖はその申し出を断った。

《ヨーロッパをかけまわる》

世界会議で、だれを基調講演者にするか、だれをゲストとして招くかといった具体的な詰めになると、「あの人は無理ではないか」「この人は協力してくれないのではないか」と、なかなか意見がまとまらない。結局、体当たりで説得するしかない、と庭野開祖は心を決めていた。

ボストンから、まずロンドンを目指したのは、英国聖公会の総本山であるカンタベリー大寺院にマイケル・ラムゼー大主教を訪ねるためだった。しかし、突然の訪問だったためラムゼー大主教は留守であった。そこで大主教代理のハンマー博士に、1時間かけて世界会議の構想を話した。

ハンマー博士は「明後日ならラムゼー大主教が帰られるから・・・」と言われたが、そのあとスイスに飛んで世界教会協議会(WCC)総幹事のユージン・カーソン・ブレイク博士を訪ね、さらに、バチカンに教皇パウロ六世を訪ねて、世界会議への協力を要請する予定になっていたのだった。

ジュネーブは、16世紀にフランスの宗教改革者ジャン・カルビンがその運動を進める拠点にした街だ。世界のプロテスタント教会の連合体であるWCCの本部もここに置かれている。プロテスタントの教会は、それぞれの教会が独立している。その教会を一つに統合しようとして生まれたのがWCCである。いわばカトリックのバチカンにあたるプロテスタントの総本山ともいえよう。

そのWCCで指導者に対して、第一回世界会議への協力を要請するためのジュネーブ訪問だった。しかし、この訪問を懸念する人もいた。「ジュネーブに行っても、おそらく世界会議の参加については色よい返事はもらえないでしょう」というのだ。

それに対して「初めからそういう固定観念をもってしまったら、世界の宗教者が一同に集う会議を開くことなど到底不可能です。世界の宗教者の会議に消極的な人がいたら、そういう人たちを説得してまわるその行動が、平和会議なのではないでしょうか」と、庭野開祖は答えたのだった。

神仏のみ心のままに生きようとする庭野開祖の心の中には、少しの迷いもなかった。(つづく)

渉外部からのメッセージ

早いもので今年も半分が過ぎてしまいました。お陰さまでこの平安月報も今年の折り返しを迎えます。折り返しといっても前半を反省し、より良い紙面づくりに励んで行きたいと思っています。印刷数も当初は100部程度だったものが200部になっています。独

りよがりの平安月報にならないよう編集スタッフも気を引き締めて取り組んでいきます。

この「平安月報」は下記アドレスからダウンロードできます。是非、ご覧下さい。

http://www.rkk-kinki.jp/kinki/thats_kyoto.html